最高のプレゼントの場

大村昌夫

お茶に誘われた時のことである。お茶を飲みながら、

「大村さん、何かを覚えることは、教えてもらうことではなく、自分で苦しみながら身につけて行くべきものですよ」

と語られた。さらに、

「預言者エリヤがケリテ川のほとりに隠れて生活をした時、神さまはからすを用いて朝に夕にパンと肉とで養われました。いまも神さまはかえりみてくださいます。からすは飛んできますよ。魂を救われた神さまは胃袋を守られるおかたです」

と、お茶を飲みながら、ゆったりと、ぽちりぽちりと語られた。これらの言葉は、精神的な苦悩、肉体的な苦痛、経済的な困窮、信仰的な戦いを味わい経験されたからこそ語られるのだろう。わたしはお茶の接待を受けながら、ゆったりと語られた言葉をお茶といっしょに飲み込んだようだ。まるでわたしの行く先を案ずるかのように語られた。

たしかに、経済的に、信仰的に苦しい道に何度となく直面した。それが自分の使命達成

のために必要欠くことのできないものであった。苦しみに直面することはつらいけれど、何かを生み出すために通らなくてはならない道であった。

聖書は、『キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい』（Ⅰペテロ四・13）と語っている。苦しみを喜ぶことはむずかしいことだが、苦しみは決して苦しみで終わらない。きっと苦しみの結晶として何かが生み出される。そこに喜びが湧く。

いまも〝自分で苦しみながら覚え身につけよ。神さまは救われた者の胃袋をも守られる〟との言葉は、尊いメッセージとして心に残っている。それは目に見えないが、お茶の場で心に残された最高のプレゼントであった。お茶を一緒に飲んだその場こそ、わたしにとって最高の教育の場でもあった。

お茶を飲みながら語られたそのお方とは、わたしの恩師晩年の野辺地天馬である。